

第23回 ちゅうでん教育振興助成（2023年度）

小・中学校の部 報告書資料

学校名・団体名	豊中市立第十五中学校
コース	学校支援コース
活動・研究のテーマ	心理検査によるアセスメントと個に応じた指導の実現

〈活動・研究の意義および活動報告〉

1. 活動に至る経緯

本校も含めて、全国的に不登校の増加が近年の大きな課題である。その背景のひとつとして発達障害の増加があげられる。昨年の文部科学省の調査では小中学生の 8.8%に発達障害の可能性があると報告されている。発達障害とは主に SLD(限局性学習症)ASD(自閉スペクトラム症)、ADHD(注意欠如・多動性障害)の総称であるが、いずれも外見からは発達障害とはわかりにくい。そのため SLD では教員からさぼりと見られやすい、ASD では周囲の生徒とのコミュニケーション不全がある、ADHD では単に問題行動として理解されやすいなど、3つの発達障害それぞれに学校生活の適応に困難な場面があり不登校につながりやすい。しかし保護者は我が子の発達障害を疑っていても医療機関への受診やカウンセリングにかかるというケースは稀であり、よくわからないまま子育てに困っていたり、学校とのトラブルになっていたりする場合もある。また医療機関受診を希望しても、待ち期間が長くなっている現状があり、費用もかかる。そのため学校で心理検査を実施できるようになれば、心理学の知見を教育に生かせる機会が増えることが見込まれる。

2. 活動、研究の目的

この状況の改善をめざして、私は学校内で心理検査や発達検査ができるように公認心理師の資格を取得した。心理検査を通して保護者が子どもの特性への理解ができ、子ども自身も特性理解をすることによりセルフケアができるようになることが期待できる。また教員にとっても子どもの特性の把握ができることで、合理的な配慮のもとで教育活動を進めることにつながるのではないかと考えた。

心理検査は子どもの認知特性や学習能力の把握ができるため、個々に応じた環境調整や効果的な学習にもつながる。結果が数値で表されることで生徒自身が抵抗感なく自己理解をするためにも有用であり、自分に合った学習方法の発見やソーシャルスキルトレーニングへの動機づけとなったりすることも考えられる。さらには教員団の中にも検査結果をエビデンスとした心理学の知見に基づく指導が徐々に根付いていくと思われ、指導方法の改善につながる可能性が高い。

このように心理検査が個に応じた教育を実現するために有用であることを検証したいと考えた。

3. 活動内容

・心理検査を行うためには、まず検査実施者の習熟が必要であり、そのための学習に相当な時間が必要であった。マニュアルや理論についての書籍や論文を参照し、検査方法だけではなく心理アセスメントの方法の理解、また検査結果をフィードバックする方法を研究した。検査器具は公開されていないため、検査方法の習得は器具が手元に届いてから練習をした。なお、今回採用した WISC-V は 2022 年に刊行されたものであるため一般的にはまだ WISC-IV が広く使用されており、関連書籍や WISC-V から新しく導入された検査事例の報告が少なく苦労した。その後、家族を実験台として検査を試行したうえで、1月に全校集会で生徒に検査について広く知らせ、学校だよりで告知を行うとともに、全校保護者に届くメールで被験者を募集した。その結果、2月末現在で3件の実施希望があった。

<ケース1 3年生男子>

・検査日時 2月17日(土)10:00-12:00 面談後検査を実施した。

・実施した検査 WISC-V 基本検査①～⑩、追加検査⑬、⑯

・結果をフィードバックした内容(保護者、本人それぞれに同じ内容をフィードバックした)

① FSIQ、信頼区間、パーセンタイルの値とその意味

② 言語理解(VCI)、視空間(VSI)、流動性推理(FRI)、ワーキングメモリー(WMI)、処理速度(PSI)の値とその意味

③ 検査を受けた時の様子や面談での会話の中からの所見

<ケース2 1年生男子>

・検査日時 2月27日(土)16:00-17:00 母親と面談を行い、検査を実施した。

・実施した検査 PARTS-TR 質問項目1～57(全項目)を実施した。

・結果のフィードバック(保護者にフィードバックした)

幼児期ピーク評定(項目 1-34 幼児期の症状が最も顕著な時の評定)、現在評定(項目 25-57)、総合的な ASD 傾向の度合いと対応について

<ケース3 1年生男子>

・検査日時(予定) 3月12日(火)10:00-12:00(実施する検査 WISC-V)

4. 子どもたちへの効果

・検査結果を保護者にフィードバックした際に、「確かに日常生活の中でもそんな傾向がある」「検査結果からは思っていたほどこの特性傾向はないようだ」等の発言があり、子ども理解につながったことがうかがわれた。

・家庭生活において保護者から本人への合理的な配慮や、本人への励まし方、トレーニングによる課題の解決方法など、適切な対応について示唆することができたように思われる。

・被験者である子ども自身にとっては、結果のフィードバックで自分の特性や得意な部分、苦手な部分が数値化されたことにより、検査時の実感とともに具体的なイメージをもって知ることができた。この自己理解の深まりは、これまでの振り返りや今後の学習方法のあり方を考えるきっかけになったと思われる。

・保護者は、次年度の担任にも今回の結果を引き継ぐことを希望された。教員の対応としても、生徒個々の特性を理解し、指導の在り方を考える上で非常に参考となる資料となると考えられる。